

—大雪山のアイヌ語地名⑤—

前回は明治十九年に北海道庁が設置され、その設置を祝うように、北海道庁の規範地図となった改正北海道全図が、明治二十一年に内務省地理局から刊行され、その地図に北海道中央高地の主な山岳名が、次のように掲載されたことを紹介した。

- ①ニセエイカウシペイ山
- ②東ヲフタテシケ山
- ③チュツベツ山
- ④ペテツトウシカムイシリ
- ⑤石狩岳
- ⑥西ヲフタテシケ
- ⑦トンラウシ山
- ⑧十勝岳

この山岳名で、初めて、「②東ヲフタテシケ」と、「⑥西ヲフタテシケ」が掲載されたのである。これは、「ヲフタテシケ」という名称の山が東と西にあるので、「東ヲフタテシケ」と、「西ヲフタテシケ」としたものと考えられる。

文化四年(一八〇七年)に、天塩川筋から山越えして、石狩川筋のタナシ(現・棚瀬山二一四・四)に着き、石狩川を下った近藤重蔵が、比布の番屋に一泊し、再び石狩川を丸木舟で下る時に、「此辺より石狩川上の山ヲツタテシケ(註「旭岳」見ゆ)と書いたのが、旭川市での最古の「ヲツタテシケ」オプタテシケ」の記録である。

明治二十三年、水田方正は旭川のアイヌ語地名を調査し、明治二十四年刊行の『北海道蝦夷語地名解』で、「アンタロマブ川筋註一現・安足間川筋」の最後の項目で、次のように書いた。

又タクカムシユベ(Ainukamushibe)一嶺山↓アンタロマ川ノ水源ナリ。岩山ニテ草木ナシ。高橋図(註「高橋不二雄作成の改正北海道全図」)ニ東ヲフタテシケトアルハ非ナリ。

当連載⑤でも紹介したように、明治十七年に内務省地理局の高橋不二雄は、札幌県地理課の福土成豊と、明治七年のライマンや明治九年の松本十郎の調査に同行した経験のある、アイヌのアヤシの案内で、安足間川から「ヲフタテシケ山(現・旭岳)へ登頂した。

掲載地図は、平成三年発行の国土地理院の五万分の一地形図の「旭岳」である。「大雪山」のアイヌ語表記が、正書法ではないが、「又タフカウシペ」となっている。山田秀三説が採用されているのである。

アイヌ語地名研究会幹事 高橋基

断章 旭川のアイヌ語地名研究 ①① 高橋基

また、⑥で山田秀三が、『北海道の地名』で、旭川市近文在住の尾沢カンシヤ

トク翁からの聞き書きとして、「大雪山」の地名解を、「又タフ・カ・ウシ・ベ(Mutap-ka-usi-be)一(安足間川を遡った所にある)温泉の【沼ノ平】の上に、いつもいる・者【山】」と、新説を提唱した。

現在では、旭岳温泉から、大雪山旭岳ロープウェイを利用して、旭岳には簡単に登る事ができる。しかし、往時は高橋不二雄の例でも分かるように、安足間川を遡り、「沼ノ平」を通じて、旭岳(「ヲフタテシケ」)に登頂したのであった。

※毎月第一週号に掲載します

